

セルフコントロールの育ち

吉村 真理子

遊びは子どもの心身の要求のあらわれ

運動会が終わっても、集団遊びのおもしろさに目覚めた年長児はそのときの種目に新たなルールを加えながらいろいろなゲームを工夫し、グループ遊びが続いている。年中児もその中に加わる子供が増えてきた。三歳児も以前にくらべると固定遊

具をうまく利用して遊べるようになったのは運動会で身体を動かすことに自信をつけたに違いない。

しかし、一方ではなぜかひとりで絵を描いたり泥団子作りに没頭する子どもの姿も目につく。子どもが帰った後の職員室で、「毎年、運動会の後で必ず泥団子作りを始める子がいると思わない？」

去年の日記を見るとやっぱりそう書いてあるのよ」「そういえばそうね、集団でエネルギーに遊んだ反動で今度は一人で静かに取り組む遊びがしたくなるのかしら」「芸術の秋っていうじゃない、だから環境の影響もあるのかな、なにかを作りたいと思うのは気候とか美術展のポスターなんかも関係あるかもしれないわね」と話題が広がっていく。その何げない会話の中には、一年の園生活での子どもたちの成長や遊びの流れが見えてくるような気がする。これまでの運動遊びを振り返ってみると、やはり気候と社会性の育ちが遊びの方向付けをしている、根底にあるのは子ども自身の心と身体のリクエストであることに気づかされる。

なわとびが流行し始める

朝の気温がひんやりしてくると、早番の職員は

門の側で子どもたちの登園を待つ間よくなわとびをしている。目ざとく見つけた子どもたちが「先生、すごーい」「かっこいいー!」「わたしもやりたーい」と取り囲む。「テラスにな



わを出しておいたからどうぞ」と声をかけると早速数人の年長児がなわをもってきて練習をはじめめる。なわを手に悪戦苦闘をつづけている子どもたちは間もなく汗びっしょりになりながら「見えて、三回つづけて跳べた」「ほくなんか十回だつて平気だよ、数えてみて」とそれぞれ跳び始める。他人が見ているとすぐに引つ掛かり「あれ? もう一回やるからね」とにぎやかだ。

運動量の多い遊びは寒い季節が最適なので、秋の深まりとともに跳びなわやボールなどを子どもたちの目につくところに用意しておく。それとともに

保育者が楽しそうにやってみせることで効果は倍増する。なわとびをしている職員はモデルの役割を果たしているのだ。モデルとは、子どもが「あんなふうには跳べるようになりたい」と具体的な目標を目に見える形で示してやることである。

別の場所では保育者が二人で長なわを回すと、保育者といっしょに何人かが挑戦してみるが、回転しているなわの間に入るのは勇気とタイミングをはかる要領が必要だ。何度か失敗しながらうまく跳べるようになると、その達成感を味わいたく長い列ができていく。なわを回す方は子どもの跳躍のリズムに合わせてやらなければ続かないので、腕が痛くなるのを我慢しながら「これが本当の一人ひとりに合わせた援助というものね、よくわかったわ」と悟りを開いたり「代わりましょう」「片方は鉄棒に結び付けても大丈夫よ」と保育者も日頃のチームワークを発揮する場になって

いる。

社会性の育ち

大なわ跳びは運動機能だけでなく、それぞれの子どもがさまざまな側面を見せてくれる。連続して途切れることなく一回ずつ跳んでは向こう側に出るリズムを楽しんでいるTは、みんなの動きをうっとりとして目で追いついて、誰かが跳びそこなうと「あーあ！」と溜め息をついていたのに、列に加わっていた四歳児がひっかかると「もう一回やっでいいよ」と声をかけ「ほら、そこで跳ぶ」と熱心にコーチしている。

なわとびの得意なAは「先生、わたしも回してみたい、いいでしょ？」と片方の持ち手を志願してきた。みんなが気持ち良く跳べるように保育者と息を合わせて回せることがうれしくてたまらないようだ。「回す方がむずかしいんだよ」と頬を上

気させている。Aに刺激されて幾人かが持ち手の交替をしたものの、跳びにくいので「やっぱりAちゃんがいいよ」と認められてAもうれしそうだ。それからは、上手に跳ばなければ上手に回せないという評価基準ができ、持ち手と認められることが目標になったのはおもしろいと思った。

そのうち、保育者のひとりが「私たちが子どもの頃はこういうのをやらなかった？」となわとびうたを披露すると「うん、やったやった」と早速うたに合わせて跳びはじめ。子どもたちもおもしろがって加わり「大波小波」「ゆうびんやさん」「くまさんくまさん」などを歌いながら大喜びで跳んでいる。おもしろいのは職員の出身地で少しずつ歌詞や動作が異なっていて「同じ県なのにどうして異なっているの」「ふしぎね、先生のとことは離れてるのにいっしょだわ」と調理師や看護婦も交えて話はずんでいる。そのことを「園

だより」で紹介すると、お母さんたちからもいくつかのパージョンが寄せられ、お迎えに見えたときの園庭でなつかしそうになわとびの仲間入りをされる方も出てきた。ここでも「あら、いっしょね、おたく何県？」とミニ県人会が開かれたりする。

なわとびうたには跳びながら会話やじゃんけんゲーム、表現遊びなどドラマチックな要素が加わるので、難易度が高い運動も楽しそうにクリヤーしている。こんな遊びを考え出した昔の人の知恵に感心したり、ほとんど全国にゆきわたっている伝播力の不思議さを考えさせられる。「くまさんくまさん」などはあきらかに外国から入ってきたものであろう。また、なわとびうたの歌詞が時代や地方によって少しずつ違っているのは遊びにつ



きものの即興性によるもので、現在でも子どもたちは言い間違いをそのまま定着させたり即興の歌詞を付け加えたりしながら楽しんでいる。

それにしても、なわ一本でなんとたくさんの遊びが展開できることか。毛糸をくさり編みした紐で、高跳び“ワゴムをつないでリズムカルに跳ぶ”“ゴム跳び”なども“なわ跳び”のバリエーションと考えられる。こうした遊びが寒い冬の季節に流行するのは跳躍することで身体が暖まることを体感した子どもたちの知恵と言うべきかもしれない。

ボール遊び

サッカーは年間を通して男児の人気スポーツだが、ドッジボールはどちらかというと寒い季節に男女の別なくよく遊ばれている。「なんだか暑くなってきた」と顔を真っ赤にしてマフラーやジャンパーを脱ぎはじめる。ボールに当てられまいと

狭いコートを走り回るのは相当の運動量とみえ「わかった、寒いときに走るとあったかくなるのは身体の中でお湯がわくんだよ、ほら口から湯気が出る」とうがった発見をする子もいる。

サッカーは蹴る技術やボールが難しそうなので年中児はあまり仲間に入らないのに、ドッジボールはおもしろそうだと年中児も加わってくる。ところがたまたたしている子は標的になりやすくすぐに当てられるのでゲームを楽しむ暇もなく外に出されてしまう。見かねた年長児が「小さい子は三回まではいいことにしようよ」と助け舟をだす。おかげでよくわからないままコート内を右往左往しながらゲームの楽しさを味わうことができた年中児は、次の日も積極的に仲間に入ってくる。そのうち、ボールの行方を追いながら反対の方に走る要領を身につけていくようになった。

ここでも感心するのは仲間に加わった年少の子

に対する配慮のこまやかさであるが、実は自分たちもドッジボールを覚えたての頃、すぐに当てられ出されてしまうので三回まで、二回までと申し合わせをしたことを思い出したことに違いない。なわとびのときもそうだったが、実状に合わせてルールを変えていく柔軟さは、相手への思いやりもあるが、みんながゲームを続けたいための工夫でもある。ここでルールにこだわっていればゲームは度々中断し、理解できないものはやめるほかはない。それでは遊びの楽しさは失われてしまう。

しかし、年長児だけでサッカーや「はじめの一步」などをしているときは厳密にルールを守ってイエローカードを出したり、ちよつとした身動きも見逃さないのは、自分たちの実力に対する誇りの現れであろう。

ボールと子どもの付き合いは乳児の頃から始ま

る。フレーベルの第一恩物が球形であることでもわかるように子どもは球形のものが大好きだ。特にボールは弾力があり両手で持ったり抱えても身体に優しく、思いがけない方向に弾

んだり転がるので遊び道具としておもしろさは尽きない。もう一つの特徴はボールを投げる（つく、蹴る）目標としての対象をもつことである。お座りができるようになると母親は子どものおなかを目かけて鈴のはいったボールをそつと転がす。あかちゃんは喜んでバタバタ叩き転がるともう一回やつてと言わんばかりに全身でせがむ。母親が「ちようだい」と両手を差し出すと、あかちゃんは身体ごとボールを母親の方へ放つてよこす。相手とのキャッチボールの楽しさを知ったのである。現在遊んでいるサッカーやドッジボールで相



手の方向へのパスもその延長線上に生まれたといえよう。

人間同士のキャッチボールは相手次第で自分の能力が引き出される。受けやすい位置にボールを投げてもらおうとキャッチしたときの何とも言えない快感が味わえる。反対に、ところかまわず投げてこられると受けそこなつてボールを追いかけるのに苦勞させられる。そうした経験は、やがて相手が受けやすいように方向と球威をコントロールする努力を引き出す。

お正月のまりつきは一人遊びのようだが、地面相手のゲームでもある。地面が返してくるタイミングをとらえなければ続かない。自分とボールの性質（よく弾む、弾まない）や地面の固さなど三者の力関係を調節するのだから、結局自分自身を相手にキャッチボールをしていることになろうか。

会話もまた言葉のキャッチボールである。絶えず相手の気持ちを受け止めながら相手に快い言葉を返すことができたら会話の楽しさはキャッチボールのおもしろさに匹敵する。

このように見てくると年度後半の運動遊びは道具（なわやボールなど）の特徴を知り、それを活かして自分の動きをコントロールする敏捷性、巧緻性を磨く遊びが登場してきているように思われる。身体の動きのコントロールは感情のコントロールにも影響を与え、相手の気持ちに添う、自分の行動を全体の動きに合わせて調節しようとする人間的に成長する姿が見られて頼もしい。つくづく子どもの心と身体は切り離せないものであることをこの時期の遊びから実感させられている。

（元松山東雲短期大学）